

先輩に続け

人生とは経験に基づいた運命と 夢や希望で変わる未来がある



パイフォトニクス株式会社
代表取締役
池田貴裕
(いけだ たかひろ)

私は2000年、工学研究科
光応用工学専攻を修了後、浜松ホ
トニクス(株)に入社し、海外派
遣、大学留学、ベンチャー企業設
立を経験しました。起業実践を通
じて起業家精神を獲得したこと
で、未知未踏の課題に対して勇気
をもって踏み出せるようになり
ました。これら私の経験を、在学
生に向けて紹介します。

光学研究者として

大学時代にホログラフィーと
いう光技術を学びました。卒業
後は光技術を専門とする浜松ホ
トニクス(株)に入社し、中央研
究所に配属されました。研究テ
マは究極の3次元表示技術であ
る動画ホログラフィーでした。研
究に集中できる非常に恵まれた
環境で、3年間の研究成果とし
て、ホログラムゴーグルという
ヘッドマウント型の開発品を展
示会で披露しました。2004

年にマサチューセッツ工科大学
へ派遣され、生物細胞の2次元定
量情報を取得する定量位相顕微
鏡の研究開発に携わりました。当
初、慣れない米国文化に戸惑いま
したが、1年が経過すると毎日が
楽しく、新しい環境は新しい価
値観を与えてくれることを実感
しました。帰国後の2006年、
浜松ホトニクス入社時に抱い
ていた「自分自身の手で研究成果
を事業化したい」という夢を実現
するために格好の場所だと判断
し、光産業創成大学院大学の博士
後期課程へ留学しました。

企業経営者として

光産業創成大学院大学は、学生
自らが起業し実践を通じて新し
い価値を創造し、研究成果を博士
論文にまとめる類を見ない大学
です。私は大学入学半年後にパイ
フォトニクス(株)を設立しまし
た。パイフォトニクスの企業理念
は、光技術を融合した製品提供を
通じて地球の平和に貢献するこ
とです。しかし、会社経営におい
て素人同然である私は、資金を使
うことが怖く第一歩を踏み出す
ことが出来ませんでした。結果的
には助成事業採択により装置試
作品を開発し、展示会への出展を
通じて起業経験者と出会い、そこ



図1. 2014年4月に開催された浜名湖花博での照明協力
ホロライト8台で250m遠方にある塔頂上を遠隔照明
ホロライト・レインボウで徳川園芸館を虹色照明

在学生へのアドバイス

で得られた経験から経営者とし
ての暗黙知が習得され始めまし
た。起業1年後、ホログラム関係
者の依頼によりLED照明装置
「ホロライト」を試作したことで、
大きな転機が訪れました。大学か
ら遠方の山に向けてホロライト
が発した一直線の光は私に夢と
希望を与え、その光に私は運命を
感じました。それから7年が経過
し、ホロライトはパターン光を発
生する光源デバイスとして進化
し日米で特許取得され、検査、演
出、建築、道路、安全、芸術、観光
通信、教育、実験など各種用途で
活用されています。

私は学生時代に県外で催され
る研究会や夏合宿に実費で参加
していました。その時の出会いが
きっかけで就職先を決め、社会人
となり再会し、それが財産となっ
ています。私の哲学は、「人生と
は経験に基づいた運命と夢や希
望で変わる未来がある」です。現
状は過去の経験により決まった
もので変えられません。しかし未
来はこれからの経験により変え
られます。新しい環境に身を置き
新しい価値観と出会い、夢と希望
に満ち溢れる新しい未来を創っ
ていきましょう。



ニュージーランドと 中国に滞在して

総合科学部 社会創生学科 4年
船越 咲 (ふなこし さき)



私は、3年生の後期から1年間
休学して、当初ニュージーランド
(以下NZ)で1年間滞在するつも
りでしたが、渡航後中国語への興
味を捨てきれず、急遽予定を変更
して、NZで半年、中国で4ヶ月
滞在しました。休学のきっかけは
3週間のアメリカ短期留学。英語
を話すことで世界中の人と意思
疎通が可能になる楽しさに目覚

め、長期留学を決意しました。両
国ともに、語学留学だけではなく
幅広い経験をしたいと考え、NZ
のワーホリでは、バックパッカー
に住み込みでドライバーとして
働き、同時にタイレストランでも
ウェイターとして働き始めまし
た。ドライバーの仕事では、領事
館で海外免許を取得するところ
から始まり、多い日には1日30人
以上のお客様を乗せて、クライス
トチャーチ市内と宿を何度も往
復送迎しました。世界各地から
訪れたお客様の旅の話に耳を傾
け運転、時には会話に夢中になっ
て道を間違えることも。自分の英
語力の未熟さを感じながらも、改
めて言語のもつ力を実感しまし
た。また、NZの雄大な自然に
も感動。南半島では、見渡す限り
山、川、動物。信号がない場所も
多く、そんな自然に囲まれてゆっ
たりと過ごす町の人たちの生活

は、ストレスを感じることはない
毎日であり、永住したいと考えさ
せてくれたほどでした。
中国語は第二外国語として大
学で学んでいたものの、会話レベ
ルには程遠いものでした。はじめ
のうちはレストランで上手く注
文ができず、苛立ちながら叫んで
こられる中国語に恐怖を感じ、と
ても苦労しました。しかし、喋れ
なければ死活問題になると感じ、
毎日必死で勉強に励みました。も
ともと漢字が好きだったことと、
周囲のフレンドリーな中国人た
ちのおかげで、3か月するとタク
シーの運転手と楽しく会話ので
きるほどになりました。4か月目
は、ホテルチェーン、ホリデー・
インでインターンシップ。VIP
ラウンジで欧米からのお客様に
は英語で、中国人には中国語で接
客を行い、まさにNZと中国で
過ごした今までの集大成のよう

な仕事でした。中国では、地下
鉄でお年寄りや妊婦が乗ってく
ると遠くに座っていてもすぐに
席を立ちあがり、「こっちに座り
な」と呼ぶ、心温まる光景を何
度も目にしました。百聞は一見に
しかず。報道だけで先入観を抱い
ていた自分が恥ずかしくなりま
した。
国籍、年齢、経歴が違う人達と
会話をし、自分が目指したいも
のは何か、多くのヒントを与えて
もらえた時間でした。この1年間
の経験は自分にとっての財産で
す。もちろん楽しい経験ばかりで
はありませんでしたが、充実した
時間を過ごせたのも常に周りの
人に支えてもらえていたからで
す。出会えたすべての人に感謝
し、世界各地、日本各地にできた
友達との未来の再会をとても楽
しみにしています。

